



悲しみよ こんにちは

サガン ★ 朝吹登水子訳

Title: BONJOUR TRISTESSE

Author: Françoise Sagan

Originally copyrighted by Librairie

Copyrighted in Japan by Shinchosha

ment with Bureau des Copyrights Français in Tokyo

かな
悲しみよこんにちは

新潮文庫

赤 118 = 1



昭和三十年六月二十五日 発行
昭和四十三年五月二十日 五十一刷改版
昭和五十八年二月二十日 九十四刷

訳者 朝吹登水子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

④ 印刷・株式会社金羊社 製本・憲專堂製本株式会社

© Tomiko Asabuki 1955 Printed in Japan

新 潮 文 庫

悲しみよ こんにちは

サ ガ ン

朝 吹 登 水 子 訳

新 潮 社 版

悲しみよ
こんにち
は

悲しみよ さようなら

悲しみよ こんにちは

天井のすじの中にもお前は刻みこまれている

わたしの愛する目の中にもお前は刻みこまれている

お前はみじめさとはどこかちがう

なぜなら

いちばん 貧しい唇くちびるさえも

ほほ笑みの中に

お前を現わす

悲しみよ こんにちは

欲情をそそる肉体同士の愛

愛のつよさ

からだのない怪物のように

誘惑がわきあがる

希望に裏切られた顔

悲しみ 美しい顔よ

第一部

第一章

ものうさと甘さとがつきまとして離れないこの見知らぬ感情に、悲しみという重々しい、りっぱな名をつけようか、私は迷う。その感情はあまりにも自分のことだけにかまけ、利己主義な感情であり、私はそれをほとんど恥じている。ところが、悲しみはいつも高尚なもののように思われていたのだから。私はこれまで悲しみというものを知らなかった、けれども、ものうさ、悔恨、そして稀には良心の苛責も知っていた。今は、絹のようにいらだたく、やわらかい何かが私に蔽いかぶさって、私をほかの人たちから離れさせる。

その夏、私は十七だった。そして私はまったく幸福だった。私のほかに、父とその情人のエルザがいた。私はこの不自然にみえる状態について、ここで説明を加えておかなくてはならない。父は四十歳で、十五年来鰥夫だった。父は若く、生活力に満ち、豊かな前途のある男だった。それで、私は、二年前に寄宿舎を出たとき、父が女と同棲することを理解しないわけには行かなかった。けれども、父が六カ月おきに女を替えることを認めるには、少し長い期間を要した。しかし、やがて父の魅力、この新しい、安易な生活、そして私の性質が、このような生活に馴じませ

て行った。父は女蕩^{たら}しで、仕事上手^{じょうず}で、いつも好奇心が強く、飽きやすく、そして女にもてた。私は苦勞せず、そして優しく、父を愛することができた。なぜなら父は親切で、氣前が良く、朗らかで、私に溢^{あふ}れるような愛情を持っていたからだ。私は、父以上に良い、そしておもしろい友達は想像できない。その夏の初め、父は、夏休みの間、現在の情人のエルザが、いっしょに住みに来ることが、いやでないかどうか、私に訊^きくほどの親切ささえあった。私は、心から賛成した。なぜなら、父にとって女が必要だということも知っていたし、他方エルザが私たちの邪魔にならないことも知っていたから。彼女は背の高い赤毛の、半玄人^{くろうと}、半商売人で、スタジオでワンスをしたり、シャンゼリゼーのバーに出入りしたりしていた。彼女は氣立てがよく、玉の輿^{こし}にのろうというような野心は持っていなかった。もともと私たち……父と私とは、『出発する』ということに夢中になっていたので、何ごとにもあれ異議を申立てるどころではなかったのだ。父はかねて地中海に面した海辺に、一軒はなれた大きな、白い、すてきな別荘を借り、私たちは、六月、暑さがはじまると、それを夢見ていたのだった。別荘は海を見下ろす岬^{みさき}の先に建てられ、松林によつて道路から隠されていた。そこから、石ころの小径^{こみち}が、浪^{なみ}の揺れている、赤茶けた岩にかこまれた金色の小さな入江へ降りていた。

最初の日々は眩^{まば}ゆいばかりだった。私たちは暑さに打ちひしがれながら、何時間も海辺で時を過して次第に健康な小麦色に焼けて行ったが、エルザだけは赤むけになってひどく痛がって

た。父は太りはじめた腹部が、ドン・ファンに似つかわしくないと考えて、ややこしい脚あしの体操をしていた。私は朝早くから水の中にいた。冷たくすき通った水の中にもぐり、パリのすべての埃ほこり、すべての陰を自分から洗い落そうと、やたらに体を動かして疲れ果てた。私は砂の上に寝そべて、そのひとつかみを手ににぎり、指の間からやわらかい黄色のひとつすじの紐ひものように流し落した。私はそれが時のように流れ過ぎて行くと自分に言い聞かせた。それは安易な考えだ。安易なことを考えるのは快いと自分に言い聞かせた。夏だもの。

六日目に、私は初めてシリルに会った。彼は海岸に沿ってヨットを走らせていたが、私たちの入江の前で転覆した。私は、彼の持ち物を拾い集めるのを手伝った。そしていっしょに笑いこけながら、彼がシリルという名前であること、法科の学生で、そばの別荘に母と夏休みを過していることを知った。彼はラテン系の顔をしていて、とても色が黒く、とてもあけっぱなしで、何か平衡のとれた、人をいたわるようなところのあるのが私の気に入った。それまで私は、乱暴で、自分のことばかり考えている、特に自分たちの青春に夢中で、その中に自分たちの空虚さの弁解や、悲劇のテーマを探さがそうとする、あの大学生たちを避けていた。私は青年たちは好きでなかった。私は彼らよりも、礼儀と思いやりを持って話しかけてくれ、父親や愛人のような優しさを示してくれる、父の友達たちの四十代の男たちのほうをずっと好んだ。けれどもシリルは私の気に入っ

た。彼は背が高く、ときに、美しく、信賴の念を起させるような美しさを持っていた。私は父の醜さざらいとは同意見ではなかったが、——なぜといって、そのため私たちはしばしばつまらない人たちともつき合うようになったのだから——私は肉体的魅力が全く欠けている人たちの前では、一種の居心地の悪さと無關心さを感じた。彼らの氣に入られることをあきらめている様子は、私には不愉快な不具のように思えた。なぜなら、氣に入られること以外に私たちは何を求めているだろうか？ 私は今日になってもまだ、この征服欲の裏に隠されているのは、生活力の過剰や、争奪欲なのか、あるいは自分自身に対して安心したいという、ひそかな、無言の、しかし根強い欲求なのか、知らない。

シリルは帰るとき、ヨットの乗り方を教えようと申出た。私は彼のことにすっかり氣を奪われながら夕食に戻った。そしてほとんど、というかほんの少ししか会話に加わらなかった。私は父が神経質になっていることにもほとんど氣がつかなかった。夕食後、私たちは毎夜するようにテラスの長椅子に体をのぼした。空は星がいっぱいにまきちらされていた。私は星を眺めた。ぼんやりと、今年は時期がいつもより早く来て、流星が空を乱れ飛ぶようになればいいと思いたが。けれども私たちはまだ七月の初めに入ったところで、星は動かなかった。テラスの砂利の上で蟬が鳴いていた。きつと何千匹もいるのだろう。暑さと月に酔って幾夜も幾夜もよっぴてこのようにおかしな声で鳴くのは……蟬はただ一方の翅鞘しやうをもう一方の翅鞘にすりつけるものだと言

かされていたけれども、私はそれが発情期の猫の声のように、本能的な喉から出る歌だと信じたかった。私は良い心地だった。小さな砂粒だけが、私のブラウスと肌の間で、快い睡気の襲来をふせいでいた。このとき、父が軽い咳払いをして、デッキチェアに上半身を起した。

「お客様が見えるんだよ」と言った。

私はがっかりして眼を閉じた。私たちはあまりにも平和だった。こんなことがそう長く続くはずはなかった！

「誰だか早く言って……」と相変らず社交界に渴望しているエルザは叫んだ。

「アンヌ・ラルセンだよ」と父が言った。そして私のほうを向いた。

私は驚きのあまり、どう反応してよいかわからないで、父を見つめた。

「アンヌに、ファッションのコレクションであまり疲れたら来ないかって言ってみたんだ。そして……来るんだって……」

考えても見ないことだった。アンヌ・ラルセンは、死んだ母の古い友達で、父とはほんの少しの交際しかなかった。けれども二年前、私が寄宿舎を出たとき、父はどうしてよいかわからなくて、私を彼女のもとへ送った。一週間でアンヌは私に良い趣味の衣裳を調べ、暮し方を教えてくれた。それで私はアンヌに対して情熱的な憧れをいだくようになったが、アンヌはそれを器用に取巻きの青年の一人にさしむけるようにした。だから私の最初のおしゃれと最初のいくつかの恋の

戯れはアンヌのおかげだった。そして私は非常に感謝していた。アンヌは四十二歳だったが、大変魅力のある、非常に洗練された人で、高慢で人生に疲れた、冷淡な美しい顔をしていた。しいていえば、冷淡さがただ一つの欠点だと言って良かった。彼女は愛想が良いと同時に冷たかった。一貫した意志と人怖^おじさせる心の静けさが、彼女全体に反映していた。離婚して自由だったにもかかわらず、愛人がいるというようなことは聞かなかった。それに、私たちは同じ種類の人たちが交際していなかった。彼女は上品な、頭の良い、思慮深い人たちとつき合い、私たちは父が望むただ美貌^{ひぼう}でおもしろい、騒がしいお酒飲みの人たちとであった。きっとアンヌは、私たちが父——父と私——がもっぱら遊びや無駄事^{むだごと}で日を送っているのを少し軽蔑^{けいべつ}していたと思う。なぜならアンヌは何ごとによらずゆきすぎたことを軽蔑していたから……。

商売上の晩餐^{ばんさん}(アンヌは洋裁の仕事をし、父は広告のほうをしていた)、母の思い出、私の努力——なぜならアンヌが私を怖じさせたとしても、私は大変アンヌを尊敬していたから——などが、私たちを結びつける唯一のものだった。とにかく、エルザの存在と、アンヌの教育に関する意見とを考えると、この突然の来訪は、いかにもまずい出来事のように思えた。

エルザは、アンヌの社会的地位についてさんざん質問したあげく、寝に上がってしまった。私は父と二人きりで残った。私は父の足下の石段に来て坐った。父はかがんで両手を私の肩にかけた。

「どうしてそんなに元気がないの？ 僕の可愛い奴、お前は野性の小猫のようだよ。僕はいい体つきをしたブロンドの娘が欲しいよ。少し太った、陶器のような眼を持った。そして……」

「そんなこと問題じゃないわ」と私は言った。「なぜアンヌを呼んだの？ そしてどうしてあの人は承知したんでしよう？」

「お前の年取った親父さん^{おやじ}に逢うためかもしれないよ。そういうことだってあり得るさ」

「でも、お父様はアンヌの興味を惹くようなタイプの男じゃないわ」と私は言った。「だってあの人は頭が良すぎるし、そしておまけに氣位が高いわ。それにエルザは？ お父様はエルザのこととお考えになった？ アンヌとエルザの会話、想像おできになって？ 私にはできないわ」

「それは考えなかった……」と父は素直にひとめした。「そうだ。そいつは大変だ。セシル……パリに帰ってしまおうか？」

父は、私の首すじにさわりながら、静かに笑った。私はふり返って父を見つめた。父の黒い瞳^{ひとみ}は光り、おかしな小さな皺^{しわ}が眼のまわりを刻み、唇^{くちびる}が少し上に反^そりかえっていた。父は牧神^{フオース}のようだった。私たちはいっしょに笑い出してしまった。父が面倒なことを惹き起すたびにいつもするよう。

「僕のかわいい共犯者」と父が言った。「お前なしでは僕はどうなるだろう？」

父の声の調子があまりにも思いつめた、あまりにも優しい調子だったので、私は、父が私なし

では本当に不幸だったろうと思った。夜遅くまで私たちは、恋愛について、そしてその複雑さについて、語り合った。父にとって、それらは想像の上だけのものだった。父は貞節、ことの重大さ、責任、などという観念を故意に退けていた。それらは真に理由のない、実を結ばないものだと説明した。それが父以外の人だったら、きっと私は憤慨したに違いない。けれど私は、父の場合、そういう態度が優しさや、献身を除外するものでないと知っていた。父はそういう感情が、かりそめのものだということを知り、またそうであることを願っているだけ、そうした気持ちに自然になるのだった。この父の恋愛観は私を魅惑した。すぐ燃えあがる、はげしい、一時的な恋愛……。私は貞節というものに魅惑される年ごろではなかった。私は恋愛のいろいろなことについてほとんど何も知らなかった。いくつかの逢引^{あいびき}、接吻、そして倦怠^{けんたい}などをのぞいては。

第二章

アンヌは一週間内には着く予定ではなかった、私は真の夏休みの最後の数日を満喫した。私たちは別荘を二カ月間借りていた。しかし私は、アンヌの到着とともに、完全なくつろぎというものが不可能になることを知っていた。アンヌはものごとをはっきりとさせ、父や私だったならわざと聞き流してしまふ言葉にも意味を与える、といった人だった。彼女は良い趣味と繊細さの境界線をはっきり置いた。それで、私たちは、彼女の突然の閉じこもり、傷つけられた沈黙、表情、そういうものの中にその境界線が破られたことを観取らざるを得なかった。これは刺激的であると同時に煩わしく、結局は屈辱的なことであつた。なぜなら、彼女のほうに理があることを私は感じていたから。

アンヌが着くという日、父とエルザとがフレジュスの駅まで迎えに行くことに決つた。私はこの遠出に加わることを断乎と断つた。父はくやしきまぎれに、汽車から降り立ったときの彼女に捧げるため、庭の唐しょうぶの花をみんな摘み取つた。私は、花束をエルザに持たせないように注意するのが精いっぱいだった。

三時、父たちが去つた後、私は海辺に下りた。堪えがたい暑さだった。私は砂の上に横たわつ

てうとうとした。シリルの声に起された。私は眼をあけた。空は暑さのために白くかすんでいた。私は返事をしなかった。私は彼とも、誰とも話したくなかった。私は、この夏の精いっぱい力で、砂の上に釘づけにされていた。重い両腕と、渴いた唇と……。

「死んでいるの？」と彼は言った。「遠くからだ」と、捨てられた残骸のように見えたよ」

私は微笑した。シリルは私のそばに腰を下ろした。私の心臓は荒々しく、ひそかに打ちはじめた。なぜなら、彼が動いた拍子に、その手が私の肩に軽く触れたからだだった。先週、元気いっばいの海軍演習よろしく、私たちは何回も、お互いにもつれ合ったまま水の奥底深く沈んだけれど、私は何の胸さわぎも覚えなかった。それなのに今日は、ただこの暑さが、この夢うつつが、この不器用な仕草が、私の中にある何かを優しく引裂くに足りたのだ。私はシリルのほうに顔を向けた。彼はじっと私をみつめていた。私はシリルを識りはじめていた。彼は年のわりに人並より平均がとれていて、真面目だった。だから、私たちの状態——この奇妙な三人家族——が彼を驚かした。シリルはそれを口に出して言うには親切すぎるか、または遠慮しすぎているかのどちらかだったが、私は、シリルが父を眺めるときの横眼の不満そうな眼差しで、そう感じた。シリルは私が悩んでいることを望んだだろう。けれども私は悩んではいなかった。今たった一つ私を悩ましているのは、彼の視線と、私の心臓の強い鼓動とであった。シリルは私の上にかがんだ。私はこの週の過去数日間のシリルに対する自分の信頼と、平静さを思い出した。そしてこ